

日本の野鳥シリーズ

ウグイスの繁殖戦略

生産部 佐藤 弘

おおかたの鳥は夫婦が共同で子育てにあたる。身近なツバメを例に挙げると、巣作りは一緒、抱卵は交替、そしてヒナへの給餌も共同である。

ところが、本種のオスはその全てをメスに押し付けて一切手伝わぬという。羨ましいと言うか、あっぱれい度胸と言うか、とにかく不思議に思っていた。

私が参加する調査地は新潟市関屋海岸保安林と言ひ、県庁から直線でもの 1km 程の砂防林である。木陰の中を、散策やジョギングを楽しむ市民が訪れる。ここ数年、一帯で本種が繁殖し始め、03年と04年の夏には巣立ちヒナに標識を装着した。

繁殖期さ中のオスもカスミ網(密漁でない事は先述の通り)に掛かる様になり、捕らえてみて驚いた。脚の爪が格段に鋭くなっていて、爪をたてられると敏感な指先に突き刺さり、大の男が悲鳴をあげる。小形種のタカやフクロウ程に握力がない分傷は浅いが、以来女性はこの時期のオスには触れたがらない。

オスはこの爪を武器に、巣に近づく天敵・ヘビを撃退して巣を守ると考えられる。更に、ネコやタヌキなどの敵の注意を自分に引き付け、巣のありかを悟られない様に、日がな一日さえ張りながら縄張りをパトロールすると私は見る。危険が迫れば「谷渡り」と呼ばれるけたたましい警戒音で、メスやヒナに姿を隠す様に促す。

人知れず、体を張ってやるべき事はきっちりとやっていた訳で、ノーテンキな道楽亭主ではなかった。

だが、オスが子育てに全く参加しない(できない)最大の理由は、本種が一夫多妻である事を後で知った。危険が多い地上近くの(主としてササ)藪で繁殖する本種の繁殖戦略は、オスは専守防衛に徹し、メス達が子育て全般を受け持つ分業だった。

余計なことでした！失礼！）とにかく：顔晴り（ガンバリ）ましよう！

私の会社に時折コンサルタント会社の営業さんが訪ねてきます。（興味のある公開セミナーには参加しているもの、会社自体をみてもらっているわけではないのですが）先日もやってきて、雑談を交えながらセミナーの案内などの情報も得ていたわけですが、なんのきっかけからだったか話が日本酒のことにまりました。（まあ当社に来れば当然酒の話になります）よくある話なのですが、彼が大学生のころ、なんの銘柄かもよくわからない酒をわけわからずに飲んで翌日ひどい目にあり、それ以来日本酒が苦手になったのだそうです。ところが卒業して就職した先の地元の酒を再び飲んだとき、びつくりしたというのです。「日本酒ってこんなに美味しいんだ！じゃあ学生るときに飲んだあの酒は一体？？」それ以来日本酒が好きになったそうです。日本酒と言うと、「甘い、ベタベタしている、悪酔いする」と酷い評価を聞くたびに日本酒好きの私は「本来はそうじゃないはずなのに、出合いの方が悪かったのだろう」と思います。（かくいう私も学生時代に一度エライ目に遇いましたが…。自業自得とも言える）スキーも最初に行ったときにお天気が良くて見渡す景色の素晴らしさに出会った人はまた来たいと思えますが、悪天候で寒くて怖い思いをした人はもう行かなくてもいい！と思うといえます。要は最初の出会いがとても大切なわけですよ。また、たとえ最初の出会いが悪かったとしても、それを払拭する何かに出会えば全く変わる。潜在的な顧客は、まだまだ沢山いると思うのです。おいしいお酒の呑み方とそれに合う料理のセット提案、音楽、楽しい会話。五感のすべてで日本酒とふれあえるような仕掛けをすることで日本酒ファンを増やしませんか？一人では無理なら二人で、二人でも無理ならもっと多くの志を同じくする仲間と共に。日本酒業界全体の底上げが、ひいては自社の繁栄につながる…。（ついでに当社も助かる：これは余計なことでした！失礼！）とにかく：顔晴り（ガンバリ）ましよう！

出会い、ふれあい・・・

お客様各位
元氣通信

淡雪酒
お酒のアイスクリーム？ お酒をシャーベット状にするだけです。淡雪のようなお酒をスプーンですくって涼しくいただけます。
雪国にいるような気分を楽しんで下さいね。

酒蔵さんとの長ーいおつきあい

第5話

新洋技研工業(株) 取締役会長 大辻英郎

25年も前の事、吟醸仕込を庫に入って見学していました。

気温が高く、雪も降らない、冷房装置もない、製氷機もない、その環境の中で杜氏が急ぎ角氷を買ってきて割って冷温器に入れてモロミの中に沈めていました。

あるところでは、雪を山から採ってきて、ジャケットタンクに詰め込んでいました。何でこんなに大変な作業をするのだろうと思ったのがジャケット循環用の冷水機、名付けて吟醸冷却機の製作につながり、更にタンクと温度コントローラーを一体化したサーマルタンクの開発につながり今では年々温暖化する気候の中で、仕込にも貯蔵にも必要な装置として4000本を納入させていただいております。

ビン詰め待ちタンクにも、ビン詰め後の残酒も
冷却して保全されております。

お手持のタンクもサーマルタンクに変身させていただきます。

次号へつづく

越後七不思議


越後国に伝わる珍しいことがら七つ集めました

5. 逆さ竹(さかさダケ) 天然記念物

枝が下向きに生えるタケ。

親鸞聖人が布教につとめられたとき、持っておられた紫竹の杖を地に挿し仏縁を説かれたところ、不思議にも、この枯竹より芽を生じ、しかも逆さに枝葉が出て繁茂し立派な竹藪になったと伝えられています。

「皆が…」の言葉に注意!

よく国会でも「国民が」と言うことがあります。それを聞く度に「え?私
はそんなこと思ってないけど?」なんて思わず突っ込みを入れたくなるので
すが、身近なところでも似たようなことって結構ありませんか?「皆がそう
言っています!」とか「皆がそう思っています」と言うけれどその実は一人
か二人が言っていたことが=「全員」になっていたりする。少数意見が正し
いときもありますが、決して「全員」の意見ではない。この表現は判断
を誤ることになりかねないときもあるので、注意が必要
です。「でも皆が、って言ったほうがインパクトが強い
じゃない?」と思っても言われる側になると、結構困りますよ~ (^^; 

東欧からの旅人

エッセイ

生産部 島貫 修一

Marta Królak(マルタ クルラク)はポーランドの女子大生。

ある夏の夕方、彼女がホームステイしている家に他の友人達と集まり、にぎやかに飲んで食べておしゃべりし、ホームパーティを楽しんだ。会話は日本語と英語とポーランド語の混合だったが、英語という共通の言葉があるので、特に不自由はなく話しが弾んだ。そして初めて生のポーランド語を聞いた時の印象は、「ロシア語に似ている」だった。どちらもスラブ系の言語なのだから当然だが、発音するのに唇が忙しくリズムも早いので同じように聞こえる。何も知らないで聞いていたら、ロシア語だと思ったかもしれない。

ポーランド人の **Marta** の容姿も、私達がイメージする欧米人とは微妙に異なり、ゲルマンとスラブの血を感じる顔立ちをしていて、ドイツとロシアに挟まれた歴史を思わせる。パーティの途中で彼女に浴衣を着せ、近所の夜祭りを一時間程見物してから戻り、再び話しの花を咲かせて夜遅くまで過ごしたが、彼女は疲れも見せず食欲旺盛だった。

夏になり夜祭りが近づくと、初めて浴衣を着せられて立ち振る舞いに戸惑いながらも、料理の中のじゃがいもを好んで食べていた **Marta** を思い出す。

Jak sie pani ma ? (ヤク シェン パニ マ : 元気ですか)